

祈祷書163頁で、聖餐式のはじめのところ。司祭と会衆で唱えるものが、3つのうちから1つを選ぶことになっています。最初の「栄光は、父と子と聖霊に」「初めのように、今も、世々に限りなくアーメン」というのは、朝の礼拝などで、詩編や第一日課の後のザカリヤの賛歌などの伝統的な歌を唱えて、最後につける、『栄光の歌』と呼ばれるものです。また二番目の『主よ憐れみをお与えください』というのは、昔から伝統的に聖餐式の初めに唱えられていた「キリエ・エレイソン」という、ギリシャ語の翻訳です。ところが、三番目の『ほめ歌え、全能の父なる神を』というのは、伝統的な祈りの言葉ですが、日本聖公会では、この祈祷書になって初めて登場しました。これは、マル・トーマ・シリア教会という、東方のカトリック教会で聖餐式に使われているものです。現在は、カトリックから分かれて、聖公会と完全相互陪餐の関係にある教会です。

この祈祷書の解説を読むと、『元来は詩編その他の末尾に用いられてきた』けれど、マル・トーマ・シリア教会の聖餐式にも採用するようになったことが説明されています。

ここで、問題にしたいのは、これを採用している、マル・トーマ・シリア教会という教会の名前です。これはイスラエルの北側、シリアの流れをくんでいる、インドの南西部にある教会なんですが、マル・トーマとは、聖トマスという意味なんです。

伝説によると、今日の福音書に登場してくる、イエス様の復活を疑ったトマスが伝道した教会です。この教会ができたいきさつについてお話します。

イエス様は復活したとき、弟子たちに向かって、「あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしてください。」と言って弟子たちを宣教に派遣したのですが、行く先を決めて、トマスには、インドに行くように命じたそうです。

ところが、トマスは、自分がユダヤ人であり、大勢のインドの人にはとても伝道できそうにない、と思って断ったのです。しかし、イエス様は、何とかしてトマスを送ることにしようと、考えました。

地中海沿岸にあるカイザリアという町は、エジプトやメソポタミヤ、それにローマなどとも道路や港でつながっている交通の要所でした。ここに、遠く東のインドから王様の命令を受けた人が、腕のいい大工を求めてやってきたのです。王様が新しい宮殿を建てたいので、是非とも建築文化の進んだ地中海から腕のいい大工を雇って来い、というわけです。

ところで、みなさん、イエス様の弟子たちで、大工だった弟子がいるのをご存知でしょうか。イエス様が大工の息子だったことはよく知られていますが、この疑いのトマスも大工だったのです。トマスを描いた絵とか石像などでは、彼はしばしば大工さんが使う、さしがねという、直角を調べたり、長さを測ったりする道具を持っているのです。

トマスにはディディモ（ふたご）というあだ名があったのですが、ディディモは、ギリシャ語であって、イエス様たちが話していた言葉であるアラム語では、双子のことを「テオーマー」と言います。ですから、「トマス」と呼んだつもりが、「テオーマー」つまり双子と聞こえたというのが真相でしょう。

話を元に戻すと、インドの王様が、自分の宮殿をローマ風にするのに、腕のいい大工を探しているということで、王様の家来がイスラエルの地中海沿岸の町、カイザリアに来ると、イエス様が、「私は腕のいい大工を僕に持っている。それを働きに行かせましょう。」と言って、トマスを、銀3リトラ（約1キログラム）で売り飛ばして、伝道に行かせた、というのです。

弟子のユダに銀30枚で売り飛ばされたイエス様が、今度は弟子を売り飛ばすので、それだけで面白くて仕方がないのですが、イエス様は、売り飛ばしたお金を、トマスに持たせたようです。

インドの王様は、トマスの描いた設計図に満足して、大金を彼に渡すと、トマスは、そのお金をみんな貧しい人たちに与えたのです。王様は、一向に自分の宮殿ができないので、トマスを呼びつけると、トマスは、それに答えて、「順調に建築は進んでいます。王様は、この世の生活を終わられた時に、それを見ることになるでしょう。」と言います。

だまされた、と思った王様は、トマスを牢屋に入れるのですが、その頃、王様の弟が病気で死んでしまうと、弟は天国に王様のために立派な宮殿ができていること見て、その後生き返って王様に告げたので、王様は回心して、クリスチャンになった、という話です。

私は、このトマスのインドでのお話を通して、トマスが、この世の目に見えるものではなく、天国の目に見えないものを信じて、伝道するものに変えられたことを思うと、彼はきっと、復活のイエス様に出会って、「わたしの主、わたしの神よ。」と信仰告白をした時、よっぽどの強い信仰を得たのだらうと思うのです。そして、それは、日曜日ごとに私たちが復活のキリストに会っている、礼拝を通して出会っていることと関係があるように思います。

わたしたちは、トマスのように、目に見えるものにとらわれてしまう存在です。そんな私たちのために、イエス様は、聖奠（サクラメント）というものを作ってくださいました。

みなさんは、聖奠（サクラメント）という、洗礼と聖餐のことをご存知でしょう。

祈祷書262頁の教会問答14番目

14. 問 救いに必要な聖奠（サクラメント）とは何ですか

答 目に見えない霊の恵みの、目に見えるしるし、また保証であり、その恵みを受ける方法として定められています

これによって、私たちは、目に見えるものを通してですが、目に見えない力が存在し、その存在を信じる者に成長します。自分の力だけではできないことを、神様の力、恵みによってできるのです。

トマスはイエス様の最初の復活には出会えませんでした。あとからキリストの体に触れることになりました。復活の1週間後にまた、イエス様が現れる、というのは、聖餐式を意味しているのではないのでしょうか。復活の日に、イエス様の墓に向かった女性たちは、そこではイエス様には、出会えませんでした。

その日の夕方、エマオへ向かっている弟子たちが、もうひとりの旅人と一緒に食事をしている時、パンをもらって、イエス様だと分かったのと同じように、弟子たちも、聖餐式をして、命のパンを食べている時、イエス様の復活に出会った。そして一週間後に、トマスも出会って、復活の確信を持てた、ということは、聖餐式のたびに、わたしたちはイエス様と出会っている、ということではないでしょうか。

この力によって、私たちも、トマスたちのように、世界に出て行って、イエス様は道であり、真理であり、命であって、わたしたちを天国の神様のところに導いてくださる方だと、宣教できるものにされるのだと思います。